

時間	SBユニット		SAユニット		その他共用部		他フロア
	リビング	居室	リビング	居室	ステーション	その他	
① 10:31	1-11	入sb12にお茶の介助					
② 10:33	13-1	近くに来た職sb2に入浴の指示を出す					
③ 10:34			13-2	職sb3に入浴の指示を出す			
④	1-12	○入sb12にお茶の介助					

数字は「中行為-小行爲」 ○1つ前の最小行爲より場所移動あり
 職ka2: 職員名 職+担当ユニット+通し番号 入ka2: 入居者名 入+所属ユニット+通し番号

図-16 交流による身体介助の中断の事例

表-8 入居者待機となるケア状況

	K施設				S施設			
	KAユニット		KBユニット		SAユニット		SBユニット	
	k-1	k-2	k-3	k-4	s-1	s-2	s-3	s-4
他職員に引き継ぐ中行為数	1	0	0	0	4	2	3	6
他職員から引き継ぐ中行為数	0	0	0	0	4	2	0	2
引き継ぎのケア内容	入浴 1				排泄 4 入浴 4	食事 3 排泄 1	食事 1 排泄 7 鑑容 1 移動・ 移乗 1	

K施設ではみられない6人以上が6回観察された。また同時の身体介助もK施設では入居者の心身状態が重度のKAユニットで2回だけあるが、S施設では多くみられ、食事に関することが8回、排泄に関することが3回である。複数人に対する身体介助の内容をみると、食事が最も多く、次いで排泄に関する日常生活の介護が多くみられる。食事については同時刻に大多数の入居者が行うため、こうした複数人に対して食事介助を行うことがみられる。

2.3.2 身体介助の中断

図-16のように、職員がそれまで食事介助を行っていたが、他職員がやってきて、しばらくの間会話をを行った。このとき食事介助を受けていた入居者は自力での食事が困難であるためこの職員との会話が終わるまで食事介助を受けることができなかった。このようにその場を共有しない職員が交流を行う間、入居者に対する身体介助が中断することを「交流による身体介助の

中断」とする。そしてその職員が戻ってくるまで入居者が身体介助を受けられないことを「身体介助の中断による入居者待機」とする。同じように職員が交流以外の他の中行為を行っている間、身体介助が中断することを「他ケアによる身体介助の中断」とする。

身体介助の中断による入居者待機となる中断回数を表-8に示す。K施設では交流による身体介助の中断回数がk-3の2回だけであったが、S施設では2～15回と多く観察された。つまりS施設ではそれだけ入居者に対して身体介助を行っているときに、その場を共有しない職員との交流が多いことを示す。他ケアによる身体介助の中断回数はK施設では3～8回であるが、S施設では14～23回とS施設の方で約2倍近く多く観察された。そのとき入居者が受けていた介護の内容は両施設とも食事が最も多い。多くの入居者が同時刻に食事を行うためこうした中断が多くなっている。また、S施設では食事以外にも排泄時に中断が多く観察された。

2.3.3 身体介助の引き継ぎ

図-17のように、それまで入居者にあるケアを行っていた職員が、他のケアを行うためにそれまでのケアを行っていた場を離れて、他の職員がケアの続きを引き継いだ。これとは逆に他職員から引き継ぐ場合もある。このように入居者に対する身体介助を他職員に引き継ぐあるいは他職員から引き継ぐことを「身体介助の引き継ぎ」とする。

身体介助の介護の引き継ぎ状況を表-9に示す。K施設ではk-1が入浴介助で他職員に引き継いだことが1回みられただけで他の職員にはみられなかった。一方、S施設では他職員に引き継ぐあるいは他職員から引き継ぐことがいずれの職員も3回以上みられた。その内容は排泄が最も多い。

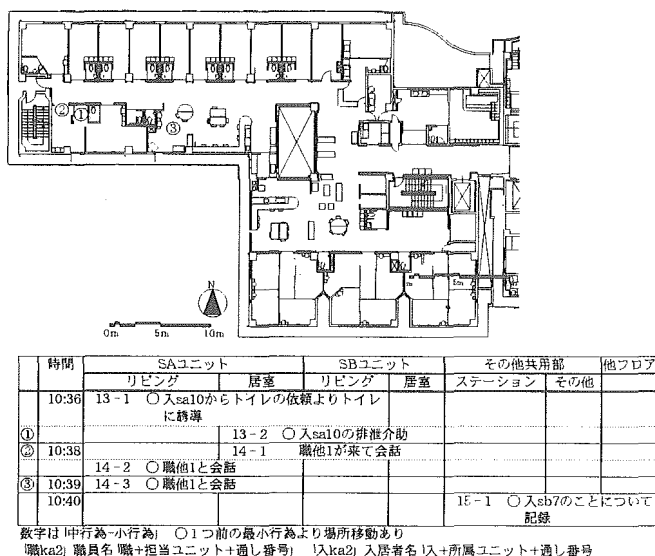


図-17 身体介助の引き継ぎの事例

表-9 身体介助の引き継ぎ回数

	K施設				S施設			
	KAユニット	KBユニット	SAユニット	SBユニット	SAユニット	SBユニット	SAユニット	SBユニット
交流による中断回数	0	0	2	0	7	2	15	4
他ケアによる中断回数	5	6	4	3	14	15	20	22
中断前のケア内容	食事 5	食事 6	食事 6	健康 管理 2 食事 1	健康 管理 3 食事 11 排泄 7	健康 管理 2 食事 11 排泄 3 移動・ 移乗 1	健康 管理 4 食事 19 排泄 12	健康 管理 1 食事 15 排泄 10

D. まとめ

さまざまな視点から職員体制の違いがもたらす職員のケアさらには入居者への接し方について分析してきた。内容を以下にまとめる。

(1)ある場所に居続ける定着について、K施設の特徴として、担当ユニット空間内に定着することが多いこと、定着回数が少なく移動が少ないこと、定着時間が長いこと、長時間定着する場所が多いこと、家具のない場所での定着が少ないことが挙げられる。S施設の特徴として、担当ユニット空間内に定着することが少ないこと、定着回数が多く移動が多いこと、定着時間が短いこと、長時間定着する場所が少ないこと、家具のない場所での定着が多いことが挙げられる。

(2)時間断面で観察された行為を小行為とし、相互に関連するものを一括りにしたものを中行

為とすると、K施設の特徴として小行為数や中行行為数が少ないこと、1中行為あたりの小行為数が多く1中行為に費やす時間が長いことが挙げられる。S施設の特徴として小行為数や中行行為数が多いこと、1中行為あたりの小行為数が少なく1中行為に費やす時間が短いことが挙げられる。つまりK施設では1つひとつの行為を持続して行い、ケアに長時間取り組んでいるが、S施設では1つひとつの行為を持続せずに次々と別の行為を行い、ケアに短時間の取り組みが多いことである。

(3)職員が入居者に対して身体介助を行うときの接し方について、K施設の特徴として、2～3人の入居者に対して続けて身体介助を行うが、それが同時に交互に違う入居者に同じ身体介助を行うことが少ないこと、身体介助の中断により入居者が待機することが少ないこと、また身体介助の引き継ぎが少ないことが挙げられる。入居者に身体介助を行うときには職員は始まりから終わりまでつきっきりで関わり、職員が入居者に1対1と個別に対応していると言える。S施設の特徴として、4人以上の入居者に対して続けて身体介助を行い、同時に複数の入居者に同じ身体介助を行うことが多いこと、身体介助の中断により入居者が待機することが多いこと、また身体介助の引き継ぎが多いことが挙げられる。職員が入居者に1対1と個別に対応していないと言える。

以上からユニットケアは入居者の生活の場であり、入居者の雰囲気やペースにあわせてケアを行うことが重要である。ユニット空間内で介護職員が忙しく動き回っていることは必ずしも入居者のペースとは言えず、環境の変化に敏感な痴呆症を抱える入居者にとって落ち着きを失うことにつながる。したがって、ユニット空間内において介護職員が移動を頻繁に繰り返すことは望ましくなく、可能な限り入居者のそばに居続ける「静のケア」が必要である。

さらにユニットケアにおけるケアとは対等な人と人の関係をもってできる限り自立を支援していくことである。こうしたケアを行う上で重要なことは「持続かつ安定した入居者との関係」を築き、いかにして個別に対応していくかが重要な点である。「静のケア」や「持続かつ安定した入居者との関係」といった介護職員のケアのあり方を可能とするために最も重要なことは、職員の1チームが入居者の1ユニットを担当することである。また1ユニットを担当する介護職員の連携をまず第1に、施設の運営上可能なら介護職員の増員を視野に入れて入居者の属性に応じた適切な介護職員人数の配置が求められる。

参考文献

- 1) 外山義他、ユニットケアのすすめ、筒井書房、2000年8月
- 2) 足立啓他、ユニットケア施設の環境整備方法に関する研究(1)、痴呆性高齢者にふさわしい生活環境に関する研究、21世紀型医療開拓推進研究事業平成13年度報告書、2002年3月
- 3) 日本看護協会、看護業務区分表、看護業務実態報告、1997

「痴呆ケア実践のための環境支援方法に関する研究(2)」
－特別養護老人ホームにおける「環境支援プログラム」の実践と評価（Phase1）－

分担研究者 下垣光 日本社会事業大学専任講師

主任研究者 児玉桂子 日本社会事業大学教授

研究協力者 影山優子、大島千帆（日本社会事業大学大学院）、倉重光一郎（日本社会事業大学）

鈴木みな子、堀江敬子、今野比奈子、大下敏之（墨田区特別養護老人ホーム たちばなホーム）

本研究では都内A特別養護老人ホームにおいて、痴呆性高齢者に適した環境改善の実践を進めるための一過程である施設環境評価を事例的に実施した。職員、入居者、家族、第三者を含む計 15 名の評価者が「キャプション評価法」という手法を用いて環境評価を実施した結果、個々人の立場や視点によって同一箇所であっても、その評価は大きく異なることが明らかとなった。

またこれらAホームにおける環境評価の結果を踏まえて、既存施設における環境づくりのための研修プログラムの方向性を検討した。

A. 問題の所在

近年、痴呆性高齢者ケアにおける「環境」への関心がいっそう高まっている。痴呆性高齢者を取り巻く様々な要素から構成される「環境」を意図的に整備、調整、配慮することで、彼らにとってより快適な環境を作り出し、それにより痴呆特有の諸行動を安定させていくことを主な目的として、各方面から様々な取り組み、研究等が報告されている。

特に施設環境においては、入居者のプライバシーの配慮や、個を尊重した環境整備の方針から、全室個室を原則とした新型特養の整備が 2002 年度から始まっている。さらに「家庭的な雰囲気」を指向する痴呆性高齢者グループホームの増加も続いている。

また、既存の施設においても、従来のフロア単位での大規模処遇から、可能な限り小規模単位でのケアを目指そうとするユニットケアなどの考

えも広く現場実践において浸透し始めている。

しかし一方で、従来型の既存の特別養護老人ホーム等の施設では、構造の変更を行うことは物理的に困難であったり、また公的施設の場合には例え微細であったとしても建物に手を加えることは容易でない場合も多い。

本研究では、こうした既存の施設に焦点を当て、そこにおける痴呆性高齢者のための環境づくりの実際とその効果、可能性等を実践的に検証することを目指している。

既存施設での環境づくりの取り組みにおける一つの課題は、建物の改修などの大がかりな環境改善計画を立案することではなく、実際にそこでケアを行うケアスタッフをはじめとした施設職員が、環境についての理解を深め、発想の転換や多面的な視点を持つことによって、痴呆性高齢者に適した環境づくりの方法を模索することであると言える。

B. 本年度の研究目的と流れ

前述したような課題を踏まえて、本研究グループでは平成 14 年度より、都内 A 特別養護老人ホームにおいて施設職員とともに、痴呆性高齢者が生活するのに適した環境づくりを、図 1 に示す 5 段階のステップで取り組み、その効果を測定する、実践・介入研究を実施している。平成 14 年度は、一連の取り組みにおける最初の研究として、ステップ 2 に該当する、複数の評価者による「施設環境評価」を実施した。

なお、環境評価の実施より前には、A ホーム職員に対し、ステップ 1 部分である、痴呆ケアと環境の理解を深めることを目的とした二度にわたる勉強会を実施した。その際に、昨年度の研究で開発した、痴呆性高齢者に適した環境の内容を指し示す「痴呆性高齢者への環境支援のための指針」を用いた。

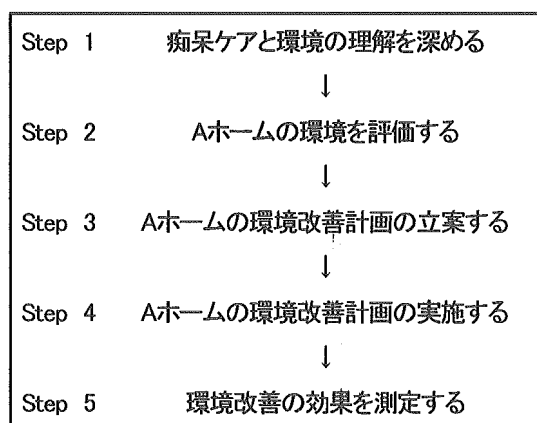


図 1 A ホームにおける環境づくりの取り組み

本年度の研究の目的は大きく分けて二点ある。一点目は、A ホームスタッフ、入居者、入居者家族、ボランティア、学生、研究者、がそれぞれに捉えた、A 施設の「環境」の注目点（評価）を明らかにすることにより、A ホームの現状を踏まえた独自の環境づくりを進めていくための目的や課題を明確化、共有化するための方向性を見出すことである。

二点目は、A ホームにおける作業過程を検証す

ることから、普遍的な環境づくりの研修的課題や可能性を導き出すこと、である。

施設環境とは、極めて多面的かつ多義的である。従ってその見方や評価は、注目する点や対象への意味づけ等によって個人間で大きく異なることが予想される。しかしながら、施設全体で環境づくりに取り組む際には、自分以外の評価者の環境への見方や解釈を理解したうえで、「環境づくり」の課題や目的を共有していくことが重要であるといえる。

C. 研究方法

1. 施設環境評価の実施

施設環境評価は平成 14 年 7 月から 9 月にかけて随時実施された。

2. A ホームと入居者の概要

A ホームは、都内 S 区において社会福祉法人が運営する公設民営型の特別養護老人ホームである。利用者定員は、入居者、ショート利用あわせて 62 名である。建物は鉄筋コンクリート 5 階建てで、2 階から 5 階までが居室フロアになっている。

入居者の平均年齢は 84.33 歳、一人当たりの平均利用期間は約 3 年 5 ヶ月である。要介護度は、要支援 2 名、介護度 1 が 4 名、介護度 2 が 12 名、介護度 3 が 9 名、介護度 4 が 13 名、介護度 5 が 13 名である。

3. 評価者の属性

施設環境評価に参加した評価者は、計 15 名である。所属の内訳は、常勤職員 4 名、非常勤職員 3 名、A ホームボランティア 2 名、入居者 2 名、家族 1 名、研究者 1 名、学生 1 名、他施設職員 1 名である。年齢は、20 歳代から 70 歳代で、最年少 21 歳、最年長 75 歳である。性別内訳は、男性 7 名、女性 8 名である。

なお、評価に参加した入居者、家族、ボランティアについては、A ホーム職員が主旨の説明したうえで、「普段（施設の中で）気になっている所はありませんか?」と尋ね、その結果職員が回答のあった箇所を撮影するという方法で評価を実施した。

表 1 環境評価参加者の属性

属性	性別	年齢	特記事項
1 職員	男	30代	常勤
2 職員	男	20代	常勤
3 職員	女	20代	常勤
4 職員	女	30代	常勤
5 職員	女	40代	週3～4日
6 職員	女	40代	週3～4日
7 職員	男	20代	週3～4日
8 ボランティア	男	70代	散歩、クラブ活動
9 ボランティア	女	60代	クラブ活動
10 入居者家族	男	70代	開所当初からの利用家族
11 入居者	男	70代	介護度3 痴呆なし
12 入居者	女	70代	介護度4 痴呆なし
13 研究者	女	50代	痴呆ケア環境専門
14 学生	女	20代	学部4年生、特養に就職予定
15 他施設職員	男	20代	

4. 施設環境の評価方法（キャプション評価法）

本研究では、施設環境評価の手法として、古賀ら（1993）が都市景観を評価するために開発し、その後施設環境評価にも援用した手法である、「キャプション評価法」を採用した。

キャプション評価法は、評価者がカメラを持って自由に施設内を歩き回り、自分がいいな（○）、いやだな（×）、何か気になるな（?!）と感じた箇所を自らが撮影する。撮影後、その箇所について①誰にとって（対象）、②何の（要素）、③どんなところが（特徴）、④どう感じられたか（印象）について、評価者自身が自由記述でキャプションを記入し、写真と共に一枚のカードにまとめていく評価手法である。

なお、本研究ではこの4つの基本項目のほかに、今後の施設環境づくりを念頭においた項目として⑤評価者が考えた環境づくりの工夫方法、⑥自由なコメント、の二項目を追加した。カードの裏

面は評価者の基本属性として、①評価者の所属（常勤職員、非常勤職員、本人、家族、ボランティア、学生、研究者など）、②性別、③年代、④コメントの選択及び記入を求めた。

キャプション評価法は、以下に挙げる特徴を有し、一連の環境づくりの取り組みにおける導入として使用するのに適したツールであると考えられる。

① 評価対象を限定しない

視覚的なものだけでなく、匂いや音などの非視覚的要因、文化、歴史、生活なども評価対象となり得る。

② 評価項目を限定しない

研究者が設定した評価項目に従うのではなく、むしろその評価項目を抽出するための定性調査的性格を持つ。

③ 写真を撮るという行為を伴う

シャッターを切るという行為は、評価の対象として気になる箇所と気にならない箇所を分ける閾値の機能を持つ。

④ 参加型調査の面白さ

自分と他者の関心の違いを知ることが出来ることは、環境づくりへの関心を促す点においても、取り組みの導入期に適している。

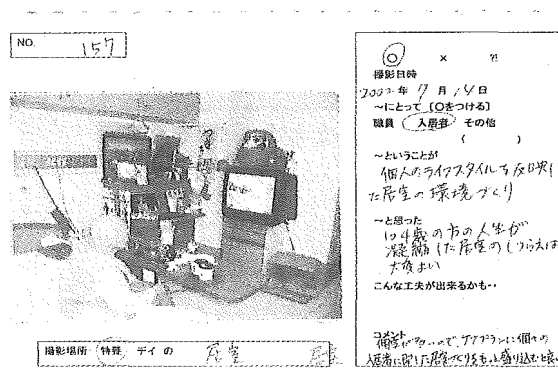


図 1 キャプションカードの実際(表面)

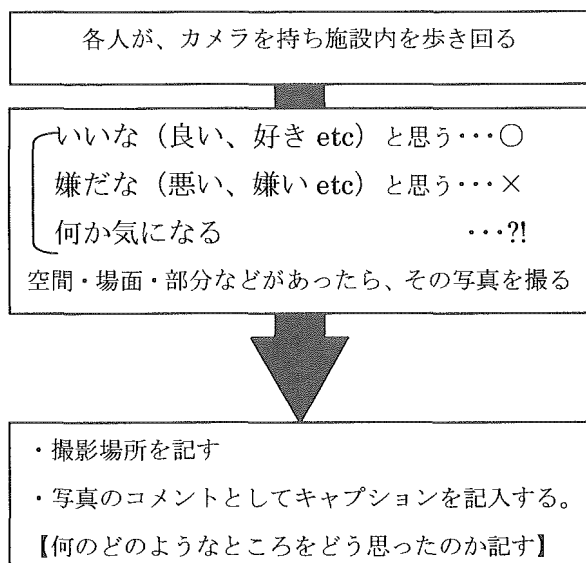


図2 キャプション評価の流れ

出典：日本建築学会大会学術講演梗概集 2001 年 P253

「入所者による高齢者福祉施設の環境評価の可能性」より抜粋

5. キャプション（自由記述）の分析方法

評価者が自身の表現で自由に記述したキャプションは、A ホームの環境づくりに向けての課題を抽出することを目的とし、以下の手順に沿ったKJ法による内容分析を行った。

1枚のカードに複数の指摘がされている記述については、意味内容ごとのまとまりに区切り、その上で記述されたキャプションをそれぞれ30字程度に内容を要約し、小カード化した。

次に、5名の分析者が共同で、作成した小カードの意味内容が類似してものを集め、小項目を作成した。次に、小項目を集め中項目を作成し、これ以上グループ編成が出来なくなるまで同じ手順を繰り返しながら大項目を作成した。分類に際しては、「良い・好き」「悪い・嫌い」「何か気になる」の、全ての評価のカードを一緒に取り上げた。

D. 結果と考察

1. 回収及び指摘された要素

1) キャプションカードの回収

3ヶ月間にわたる評価期間を経て、15名の評価

者によって合計129枚のキャプションカードが記入、回収された。129枚のカードにおける評価者の属性の割合は、常勤職員39枚（31.0%）、非常勤職員13枚（10.0%）、入居者9枚（7.0%）、入居者家族3枚（2.0%）、ボランティア4枚（3.0%）、研究者15枚（12.0%）、学生29枚（22.0%）、他施設職員17枚（13.0%）であった

2) 環境評価の視点

図3は129枚のカードの、評価の内訳である。○（良い、好き）と評価されたカードは、41枚であったのに対し、×（悪い、嫌い）と評価されたものは70枚と圧倒的に多く、全体的に厳しい評価がなされていた。また、?!（何か気になる）と評価されたものは18枚であった。

図4は、評価ごとの属性の内訳を示したものである。これによると、全体的に常勤、非常勤職員を合わせた施設職員は、他の評価者に比して施設環境について厳しい、つまり〔×〕の評価をしていることが分かる。

反対に〔○〕の評価は、学生、研究者、他施設職員だけで70%程度を占めていることから、第三者の方が〔○〕の評価を多くつけやすいということが言える。

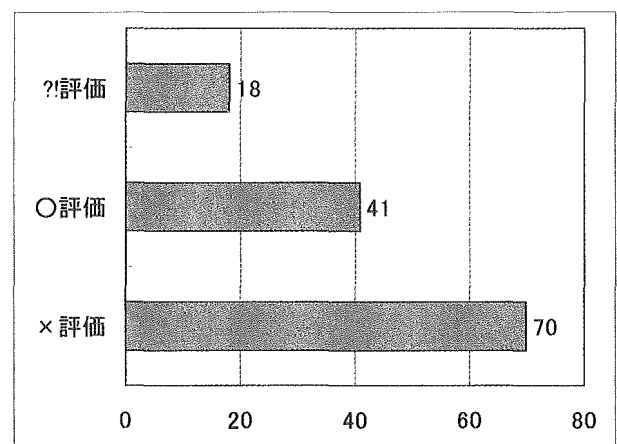


図3 評価の視点

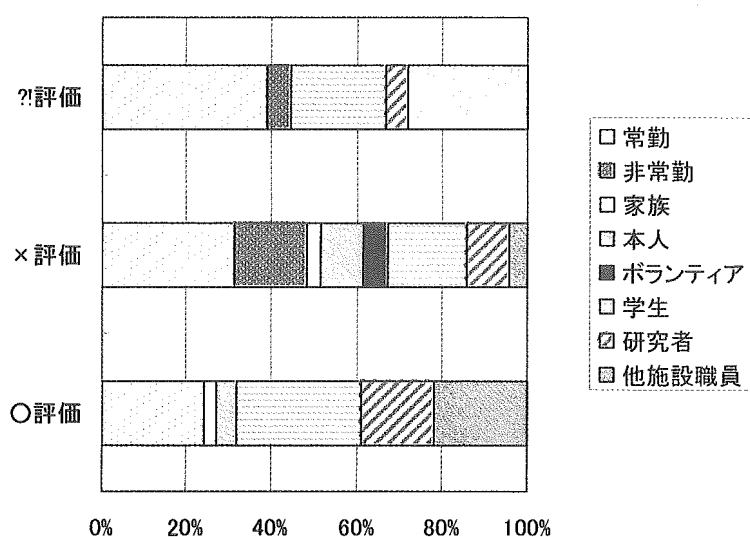


図4 各評価ごとの属性

3)指摘された箇所

図5は、指摘された箇所別の出現回数を示したものである。

Aホームの環境のうち、最も多く指摘された箇所は、「廊下」で指摘したカードは22枚であった。評価としては、「殺風景な雰囲気である」「廊下に置いてある椅子の位置が悪いのであまり利用されていない」などの〔×〕評価と、「廊下についている手すりの素材が温かみがあって良い」「写真や絵が飾られていて良い」といった〔○〕の評価があった。

次に多く指摘された箇所は、「居室」の21枚で、「居室内に写真や絵を飾るスペースがない」「入居者の使いやすい家具や飾り物がたくさん持ち込まれていて良い」といった評価が見られた。

次は「食堂」の17枚で、「見通しは良いが季節感を感じることが出来ない」〔×〕、「広いので色々な催しの会場として使いやすい」〔○〕などの評価が見られた。さらに「浴室」への指摘は10枚であったが、「浴室入り口が狭い」「衣類や物が雑然と置かれていて使いにくい」といった、いずれも〔×〕評価のみであった。

この結果から、日常的に使用する機会が多い箇所ほど、指摘される回数も高くなっていることが分かる。また、同じ撮影箇所であっても評価者によって評価の視点が異なるケースも多く見られた。

2. キャプション（自由記述）の分析

カードに記述されたキャプションを、先に示した手順により分析した結果を文末の表1～6に示す。この結果、「生活感のある環境」「快適な環境」「多様な交流を支える環境」「プライバシーの配慮」「事故の予防と安全の確保」「入居者と介護者にとって使いやすい環境」の、6つの大項目が抽出された。次頁図6は項目間の関連を示した空間配置図である。

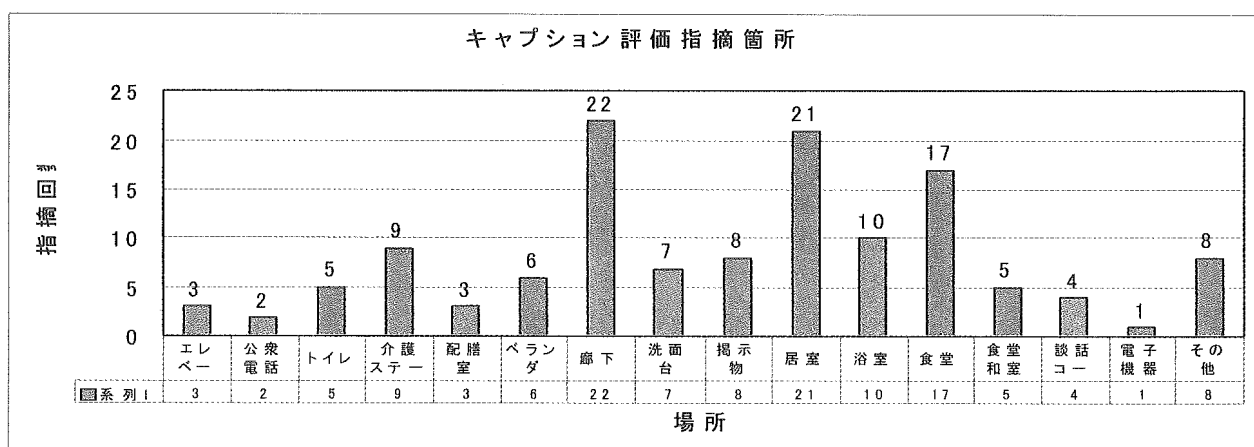


図5 指摘された箇所

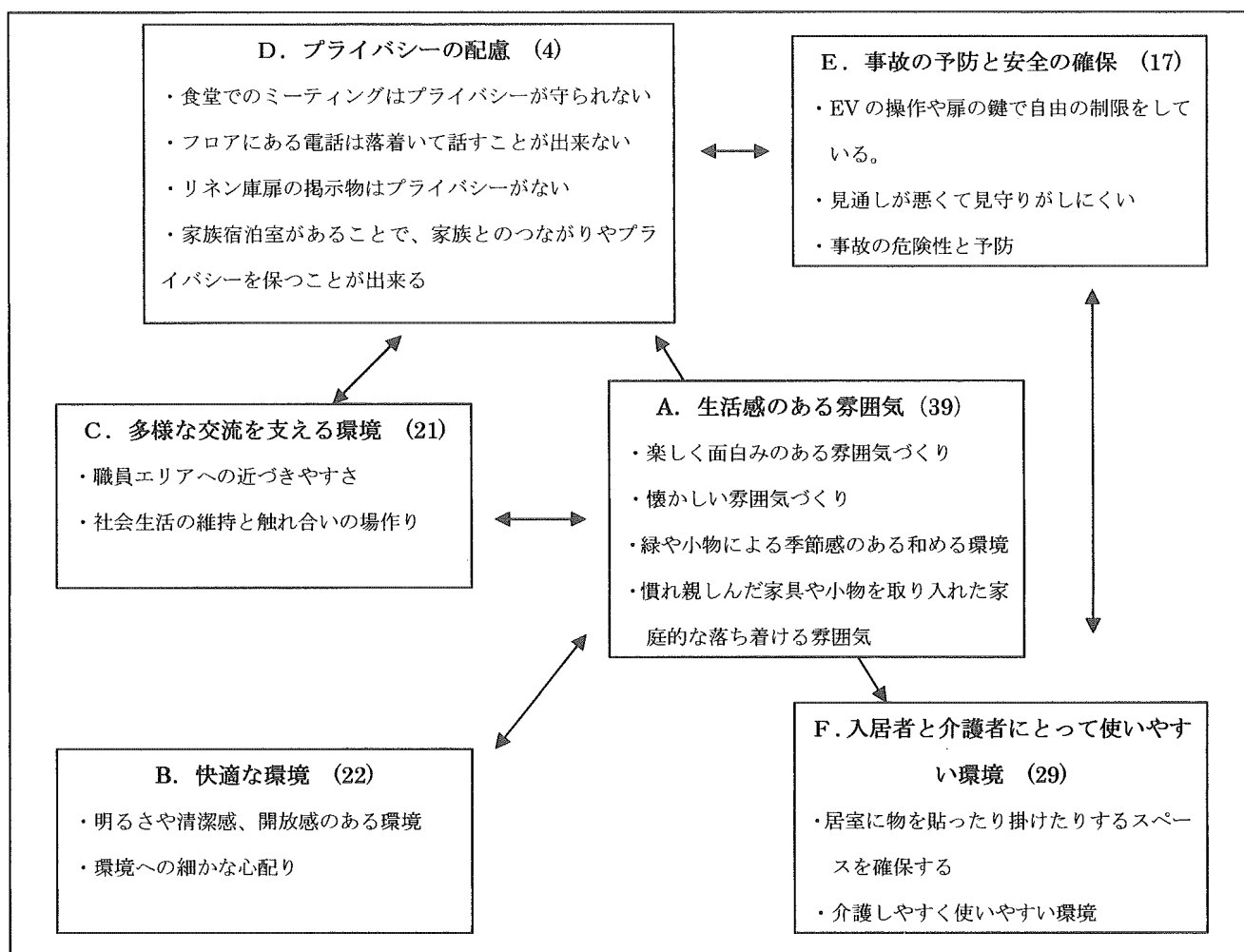


図6 抽出された項目間の関連

以下、それぞれの大項目の内容を記す。

1)「生活感のある環境」は、生活を取りまく様々な雰囲気作りについて評価したカードが集められている。これは、施設的になりがちな「殺風景な雰囲気」になってしまっていることを指摘した意見や、反対に、様々な工夫により「懐かしい雰囲気づくり」や「季節感のある環境」「楽しく面白みのある雰囲気づくり」「家庭的で落ち着ける雰囲気づくり」という中項目から構成されている。

2)「快適な環境」は、屋内の空気質についての評価や、食堂や廊下、ベランダなどが開放的であったり、自然光が入り込んでいること、または清潔感などを評価した「明るさや清潔感、開放感の

ある環境」や、フロア内や掲示物などの雑然とした状態を指摘した、「環境へのきめ細かな心配り」が中項目として存在している。

3)「多様な交流を支える環境」は、立ち入りが制限されがちな、介護ステーションや配膳室といった場所に、入居者が普通に近づくことが出来るような工夫をする「職員エリアへの近づきやすさ」や、施設に居住していても、社会とのつながりを保てるような配慮や、入居者同士の触れ合いを促すような工夫を行うといった「社会生活の維持と触れ合いの場作り」といった中項目を持つ。

4)「プライバシーの配慮」は、抽出された6つの大項目のうち最も少なく、全部で4カードのみで

あった。

具体的には「食堂で職員ミーティングを行うことは入居者のプライバシーが守られない」「フロアに置かれている電話は（会話が筒抜けなので）落ち着いて話をする事が出来ない」「リネン庫の扉に貼られている排泄介助用のメモは、入居者のプライバシーが守られていない」などであった。

5)「事故の予防と安全の確保」は、入居者が立ち入ると、危険を伴う可能性があるエレベーターや配膳室などの扉が、何らかの形で制御されていることについて消極的に評価している「エレベーターの操作や扉の鍵で自由の制限をしている」や、入居者の安全のための見守りのしづらさを指摘した「見通しが悪く見守りがしにくい」の中項目がある。

またその他、廊下の家具の置きや施設備品の状態が適切でないことを指摘した消極的な意見や、事故の予防と安全を保证するための積極的な評価が混在した「事故の危険性と予防」という中項目により構成されている。

6)「入居者と介護者にとって使いやすい環境」は、入居者や家族、職員にとって使いやすい居室空間を作る必要があるという指摘や、施設内の様々な設備や掲示物などが、入居者の身体状況に合わせた位置や使いやすさになっているかといった「入居者の身体状況に配慮した環境」や、ケアスタッフにとって「介護しやすく使いやすい環境」であるかといった中項目によって構成されている。

以上に挙げた6つの大項目が、キャプションの分析により抽出された。様々な立場の評価者が、実際にAホームを見て歩きながら評価することによって得られたこれらの項目は、Aホームの現状を踏まえた環境的課題や、評価者の環境づくりに際しての課題や希望を的確に捉えたものであると考えられる。このため、この6つの項目を「A

ホーム環境づくりのキーワード」として、今後の環境づくり計画の作成のための指針とした。

既存の施設における環境づくりは、先にも述べたように、現実的には様々な制約が存在している場合が多い。また、一方的な見方からの環境整備は、居住する入居者に混乱をもたらすことも予想される。

環境づくりを始める際に重要なことは、時流に乗るだけでない、施設の現状に沿った独自の課題や方向性を導き出すことであるといえる。

本研究で行った施設環境評価は、第三者を含めた複数の評価者がそれぞれの立場からAホームの環境について、自身の視点と記述によって実施された。その結果、「生活感」「家庭的」といった現在の主流となっている要素が入りつつも、単にスローガンのなものにとどまらない、Aホームの現状に沿った具体的な課題や方向性を導き出すことが出来たといえる。

3. 環境づくりの研修に向けての課題

次に、本研究の二番目に挙げた目的である、Aホームにおける作業過程を検証することから、普遍的な環境づくりの研修的課題や可能性を導き出すことについての、現段階での結果を述べる。

本研究で行った施設環境評価は、一連の施設環境改善計画における導入部分であるため、現段階で、全体を通した研修方法やその課題を示すには、まだ不十分である。しかし、本研究で行った施設環境評価の取り組みから、次に述べる二点の研修の方向性の示唆を得た。

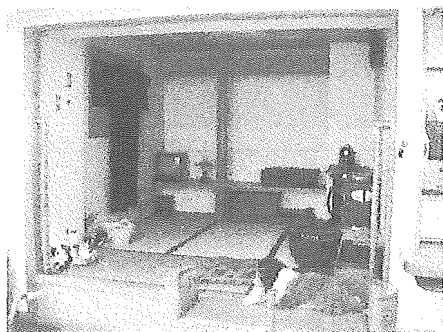
1)環境が持つ多面性への理解

キャプション評価法による施設環境評価を実施した結果、Aホーム内の同一箇所の指摘であっても、評価者によってその評価が異なるケースが多く見られたということを先に述べた。これは、個々の評価者が当該箇所についてどのような視点を持ち、どのような意味づけを行うかというこ

との違いが反映された結果であると考えられる。

ここでは例示として、A ホームの食堂奥にある和室空間について、5 名の評価者がそれぞれに撮影した写真とその評価を示す。

Case1

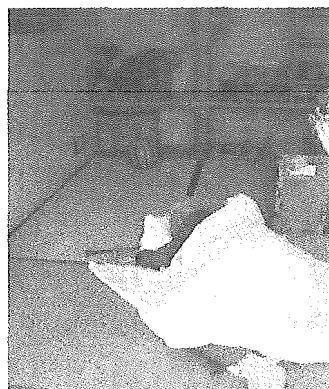


評価者：A さん（非常勤職員）

評価の視点：○

キャプション：畳、着物、昔の古いものなどが飾ってあることが懐かしい雰囲気がして良いと思う。

Case 2

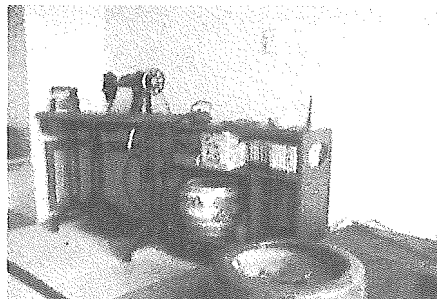


評価者：B さん（常勤職員）

評価の視点：○

キャプション：居室以外に入居者が休む場所があることは、部屋以外の自分の居場所になって落ち着く。

Case3

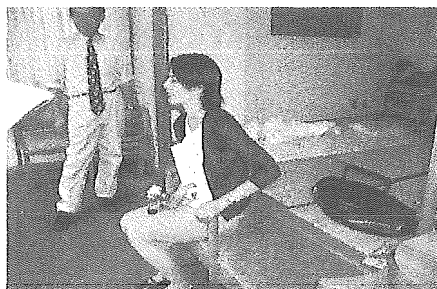


評価者：C さん（他施設職員）

評価の視点：○

キャプション：和室に昔の物を置いているところが、暖かい雰囲気を感じた。

Case4

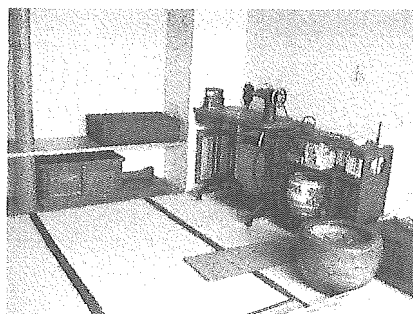


評価者：D さん（研究者）

評価の視点：×

キャプション：せつかくの和室が暗く、物置のようになっている。使いたい空間になっていないのでは？

Case5



評価者：D さん（学生）

評価の視点：×

キャプション：和室には懐かしい物品が揃い、ただの物置にはなっていない。が、実際に使われている様子がなく照明が暗くて勿体ない。

5枚の写真とキャプションが示すように、同一箇所であっても評価者によってその目線や評価の視点は大きく異なっている。環境づくりや環境への理解を促すひとつの方向性としては、こうした実際に行われた環境評価の例示を示すことにより個々人の環境への見方には差異があることを理解し、環境に対して固定的でなく、柔軟な発想を会得することにあるといえる。

2)環境がその時々を持つ意味の違いを理解する

環境づくりを実施する際には、「誰にとっての、何のための環境づくりか」ということが常に検討される必要がある。つまり、対象者の状態や嗜好、その他の状況によって、環境の持つ意味は変化する可能性がある。

ここでは、A ホーム配膳室のドアについて指摘した2つの評価を例示する。

Scene1 配膳室の扉が開いている

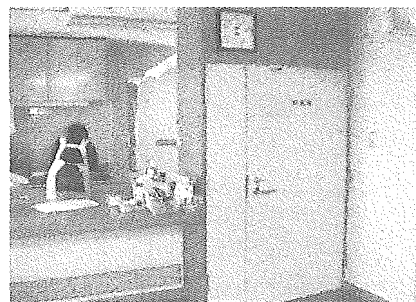


評価者：学生

評価の視点：○

キャプション：配膳室の扉が開いていることが、自由で開放的な感じがして良いと思った。

Scene2 配膳室の扉が閉まっている



評価者：常勤職員

評価の視点：○

キャプション：配膳室にドアがあることが、職員にとっては安全管理が出来る。危険防止が出来る。

例示した2つの写真は同一箇所である。これらには、配膳室入り口の扉が開いている状態と閉じている状態、という違いがあるが二人の評価者は二つの状況をそれぞれの理由から「○」と判断している。

scene1の評価者である学生は、配膳室という通常ならば入居者の立ち入りが制限されがちな場所の扉が開放されていたことについて、「自由で開放的な感じがする」という評価を行っている。

一方、scene2の評価者である職員は、そこで日々勤務している立場から、配膳室に扉があり、それが閉まっていることで「安全管理」や「危険防止」が出来ることを評価している。

この事例から言えることは、評価者の立場やその時々状況の違いによって、環境が持つ意味が変化したり、価値が対立する場合（自由と安全管理など）があるということである。

環境づくりを進める際には、このように「誰にとっての何のための環境」かということを念頭に置き、その時々状況で最も最善である環境配慮を行うべきであることを理解する必要がある。

D. 結論及び今後の課題

Aホームにおいて施設環境評価を実施した結果、環境に対する様々な視点や意見が明らかになった。

特に、職員からの評価は現状に対してやや厳しい視点を持つものが多く、普段から職員らが環境について関心を向けていることが示唆された。一方、第三者からの視点は、施設関係者にとっては日常的になり過ぎて見落とされがちな指摘が多くなされて、このことは職員とっても新たな発見になったといえる。

今後職員を中心に進められていく、具体的な環境づくりの過程においては、ここで明らかになった環境の多面性を踏まえ、実施目的や誰にとっての環境づくりかということについて、職員間で共有していくことが大きな課題になるといえる。

また、キャプションの分析から得られたAホームにおける6つのキーワードは、Aホームの環境づくりの取り組み全体の流れにおける、環境への理解を深め、自施設の環境を客観的に把握するという最初のステップである。次段階の課題はキーワードを踏まえ、実際の環境づくりプランを立てていくことである。

今回使用したキャプション評価法は、環境を視覚的に捉えることが出来、「環境」の持つ多面性を理解できると同時に、環境に対する「個人の環境への解釈過程」に焦点を当てる機能を持っている。このため研修ツールのひとつとしての可能性を有しているといえる。

今後はさらに複数箇所の施設で実施し、評価者の属性との関連を調べ、抽出されるキーワードの施設や属性による違いを明らかにしていくことで、施設形態や職員状況に応じた研修の進め方を検討する必要がある。

- 参考、引用文献 -

・日本建築学会(編), 2000, 「よりよい環境創造

のための環境心理調査手法入門」, 東京、技報堂出版

・古賀誉章, 小島隆矢, 岩澤直子, 宗方淳, 皇俊之, 平手小太郎, 2001, 入所者による高齢者福祉施設の環境評価の可能性 - 利用者による高齢者福祉施設の環境評価その1 -, p.253-254, 日本建築学会大会学術講演梗概集

表1 生活感のある環境

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲居室が殺風景 ・ ▲食堂が殺風景 ・ ▲トイレが殺風景で家の雰囲気を感じない ・ ▲廊下の白い壁面が病院のようだ ・ ▲廊下が病院のようで殺風景 ・ ▲食堂の様子が病院のようだ 		殺風景な雰囲気
<ul style="list-style-type: none"> ・ 食堂の和室は昔のものを活かした懐かしい雰囲気である ・ 昔のものを活かした懐かしい雰囲気 		懐かしい雰囲気作り
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人のライフスタイルを反映した居室のしつらは人生を凝縮している ・ 居室に色々な物を持ち込んでいることは生活に近づいていて良い ・ 居室に写真を飾っていることは利用者をよりよく知るヒントになる ・ 居室に使い慣れ家具等を持ち込んでいる ・ 配膳室に個人の嗜好物が置かれていることで個性が高まる 	慣れ親しんだ家具や小物を持ち込んでいる	慣れ親しんだ家具や小物を取り入れた家庭的な落ち着いた雰囲気づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲廊下にある絵が生活の場にそぐわない ・ ▲廊下の絵の数や種類が家庭的でない ・ ▲浴室内の壁の絵が病院のようだ ・ 食堂の和室が落ち着ける居場所になっている 	家庭的な落ち着いた雰囲気づくり	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲廊下の絵がいつも同じで殺風景 ・ ▲廊下の雰囲気に変化がなく面白みにかける ・ 小物や写真等による廊下の雰囲気づくりをしている ・ 利用者 あのクラブ活動の成果がある掲示物に個性を感じる 	小物や絵などによる楽しく面白みのある雰囲気作り	楽しく面白みのある雰囲気づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・ 介護ステーション近くにある置物や小物は季節感を感じさせる ・ 食堂に置いてある小物は季節感を感じさせて良い ・ ベランダにある鉢植えは季節感があって楽しめる 	緑や小物で季節感を演出する	緑や小物による季節感のある和める環境
<ul style="list-style-type: none"> ・ 居室に緑を取り入れることで固い雰囲気を和ませている ・ 食堂に植物が多く置いてあり癒される ・ 廊下にある緑は心が休まる ・ 食堂の緑はフロアの雰囲気をすがすがしくしている 	緑のある和める環境	

注) ▲は×(悪い・嫌い)評価

表2 快適な環境

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲ボランティア室が薄暗く換気が悪い ・ ▲居室前に汚物室があるのでくさい 	屋内の空気が悪い	明るさや清潔感開放感のある環境
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲せつかくの食堂の和室が暗く物置のよう活用されていない ・ ベランダは高い柵で覆われていることがなく開放感がある ・ 食堂には朝日が当たり時間の感じられる明るさがある ・ 開いている廊下の窓は開放感がある 	明るさや開放感がある雰囲気	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲トイレに排泄介助用のバケツがあり清潔感がない ・ 居室に洗面台があることが清潔感がある 	清潔感を保つ	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲介護ステーションが雑然としている ・ ▲食堂が雑然としている ・ ▲浴室が整理されておらず雑然としている ・ ▲介護ステーション裏側にある窓は柵や荷物が邪魔して近づきにくい ・ ▲掲示物の貼り方の見栄えが良くない ・ ▲製水機の排水が不適切な形状をしているので水漏れする 	共有空間が雑然としている	環境へのきめ細かな心配り

表3 多様な交流を支える環境

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 廊下に意見箱があることで利用者の意見を尊重している ・ 痴呆フロアにも電話があるので社会とのつながりが保てる ・ 各フロアにある電話は社会とのつながりを保っている 	社会生活の維持	社会生活の維持とふれあいの場づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲介護ステーションの椅子の置き方が病院の待合室風である ・ ▲廊下の椅子の配置が良くない ・ ▲談話コーナーがふれあいの場として活用されていない ・ ▲廊下にあるソファが活用されていない ・ ▲談話コーナーのテレビの向きが悪い ・ ▲談話コーナーが使われていない ・ ▲談話コーナーが丸見えで落ち着かない ・ 廊下にあるソファがふれあいの場になっている ・ 介護ステーション前に職員と入居者のふれあいの場がある ・ 廊下にすわり心地のよさそうな椅子がある 	共用スペースにおけるふれあいの場作り	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲ベランダに花があるが利用者が手入れに参加しにくい ・ 廊下に行事の写真を貼ることで話題づくりになる ・ ベランダでの花の栽培は素敵な空間でありよい話題にもなる ・ 廊下の電子ピアノに気軽に触れることができる 	写真や植物などによる話題づくり	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲配膳室にドアがあるので利用者が立ち入ることが出来ない ・ 介護ステーションの扉が開いていて訪れやすい ・ 配膳室のドアが開いていて開放的 		

注) ▲は×(悪い・嫌い)評価

表4 プライバシーの配慮

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲フロアにある電話は落ち着いて話をする事が出来ない ・ ▲食堂での職員ミーティングはプライバシーが守られない ・ ▲リネン庫扉の掲示物はプライバシーが守られていない ・ 家族宿泊室は家族とのつながりやプライバシーを保つことが出来る 		

表5 事故の予防と安全の確保

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲エレベーターの操作を制限しているのは利用者や家族の自由を奪っている ・ ▲エレベーターを自由に操作できない(制御板がついている) ・ ▲配膳室の扉に鍵がかかっており、入居者の自由を制限している 	エレベーターの操作や扉の鍵で自由の制限をしている	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲介護ステーションからの見通しが悪く見守りにくい ・ ▲寮母質からの見通しが悪く見守りがしにくい 	見通しが悪く見守りにくい	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲廊下のソファがコーナーに配置されていて危険 ・ ▲トイレに手すりがなく危険 ・ ▲排水溝のふたの形状が踏むと痛そうで危険 ・ ▲洗面台のお湯の調整が難しくやけどの危険がある。 ・ ▲洗面台が高すぎる ・ ▲椅子が邪魔して廊下の手すりが使えない ・ 抵床ベッドを使って抑制を防止している ・ 配膳室にドアがあるので安全管理が出来る ・ 痴呆フロアでも洗面台に石鹸を置いてあり、生活感がある 	事故の危険性と予防	

注) ▲は×(悪い・嫌い)評価

表6 入居者と介護者にとって使いやすい環境

具体的内容(キャプションの要約)	小項目	中項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲居室に掲示物を貼る適切なスペースがない ・ ▲居室に物を掛ける場所がなくて不便 ・ 居室に収納スペースが確保されていて色々な物を持ち込めて生活の継続性が図れる ・ ▲洗面台が利用者にとって高すぎる 		居室に物を貼ったり掛けたりするスペースを確保する
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲トイレトペーパーの位置が悪く手すりを使用する際に不便 ・ ▲洗面台が浅く水が飛び散るので使いにくい ・ 廊下の両側に二本手すりがあり使いやすい ・ 居室のトイレが個人の身体機能やライフスタイルに合わせた工夫がある 	利用者の身体状況に合わせた設備	利用者の身体状況に配慮した環境
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲掲示物の文字が小さく見えにくい ・ ▲廊下に飾ってある絵の位置が高い ・ ▲介護ステーションの掲示物の位置が高い 	掲示物の文字の大きさや高さが利用者にとって見えにくい	
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲居室のスペースが狭い ・ ▲食堂の壁の出っ張りが邪魔して狭くなっている ・ ▲洗面台の周囲が狭くて動きにくい ・ ▲ベランダの囲いの構造が悪く利用者が利用しにくい 	面積が狭かったり構造が使いにくい	介護しやすく使いやすい環境
<ul style="list-style-type: none"> ・ ▲浴室のシャワーホースが短くて使いにくい ・ ▲浴室のリフトの位置が悪く使いにくい ・ ▲浴室の水はけが悪く使いにくい ・ ▲浴室の入り口が狭く危険 ・ 食堂が多目的に使える 	設備が不備で介護がしにくい	

注) ▲は×(悪い・嫌い)評価

厚生労働科学研究費補助金（効果的医療技術の確率推進臨床研究事業）
分担研究報告書

ケアユニットのインテリアデザイン手法に関する研究（２）
ーモデルプランの作成と施設への適用の検討ー

委託研究者	吉田紗栄子	一級建築士
研究協力者	清水忠男	千葉大学教授
	佐藤公信	千葉大学助教授
	千葉大学工学部環境デザイン研究会	
		(篠崎正樹・仙田学他)
	沼田恭子	一級建築士
	ジェリィフォリー	カラーリスト
	駒田倫子	株)フットマーク 商品開発担当
	伊藤納奈	慶應義塾大学 SFC 研究所
	加藤知徳	一級建築士
	加藤徹也	一級建築士

本研究は 13 年度の研究をふまえ、特別養護老人ホーム痴呆ケアユニットのインテリアデザインにおいて、設計者と施設関係者の双方が検討を行うことができる設計手法の提案と、その手法によって検討されたモデルプランの提示を行うものである。またこの新しい設計手法と、PEAP の 8 つの指針との関わり方を示し、PEAP 評価尺度を設計段階で反映させる方法についても検討を行った。

A 研究目的

建築設計の過程の中で、特にインテリアデザインに関する部分は、施設側の考え方を具体化する作業である。この段階では、施設側と設計者が話し合いを行い、施設の利用方法に直接・間接的に関わる内容について、過不足なく図面に盛り込む必要がある。これは、その後の設計を進める上でも基盤となる重要な作業であるが、この段階での、設計者と施設側双方に指針となる一般化された尺度が、痴呆ユニットの場合まだほとんど確立されていない。

特にデザイン（設計）する時には、施設利用時のさまざまな問題（行動・心理など）を、具体的

な建物の形状としてまとめるために、設計図などの視覚的な情報を用いて多面的な検討を行う必要がある。しかし図面の抽象的な表現を理解することは難しく、施設側の真の要望を取り入れて図面化することが困難となる場合がある。このようなことを避けるために、図面に必要とされている情報や図面に反映された内容において、設計者と施設側が適切な段階で必要なコミュニケーションをとる事が望まれる。

本研究では、まずインテリアデザインの段階で、設計者が設計図をまとめる時に必要な情報を明らかにし、この情報を施設側の視点も含めて検討するための設計図面の検討方法を設計手

法として提案することを目的とした。そのため、実際に設計が行われている施設を例とし、設計図を用いて具体的モデルプランを示すこととした。建築的な説明においては、さまざまな検討項目を考慮する際に、最も主要な図面の一つである平面図を中心とした検討について取り上げることとした。

またケアユニットの考え方については PEAP の評価尺度が、すでに建設されたケアユニットの環境評価項目として日本の現状に適合させるために研究が続けられてきた。本研究では、この PEAP 評価尺度を設計における指針としても活用するため、本研究で提案する設計手法をこの評価尺度との関連をまとめ、インテリアデザインの設計段階において、評価尺度をどのように考慮すべきかについても検討を行った。

本研究の内容は以下のとおりである。①方法（この設計手法の体制）②設計の基本概念と検討事項③改善の具体例④施設側の検討方法⑤ PEAP 評価尺度と設計内容との関連⑥考察及び

まとめ

B. 方法

I. 設計対象について：

本研究では、愛知県半田市に平成 16 年 4 月に開所する特別養護老人ホームの痴呆ケアユニット (10 名/2 ユニット・8 名/2 ユニット) 4 タイプを設計対象とした。

II. 具体的検討事項について：

本研究では、まず痴呆ユニットのインテリアデザインを考える上で、PEAP 評価尺度全てに関わり、かつ設計においても重要な基本概念として「Way finding (経路探索)」を考慮することとした。この場合の Way finding とは、施設内全体の位置関係をわかりやすく統合、誘導するシステムのことである。迷う・遠回りする・探すなどにより身体的・精神的な負担が生じるが、特に高齢者にとっては、このような問題がより大きな負担となることが考えられる。しかし Way finding は、施設の形状などに関わるため、

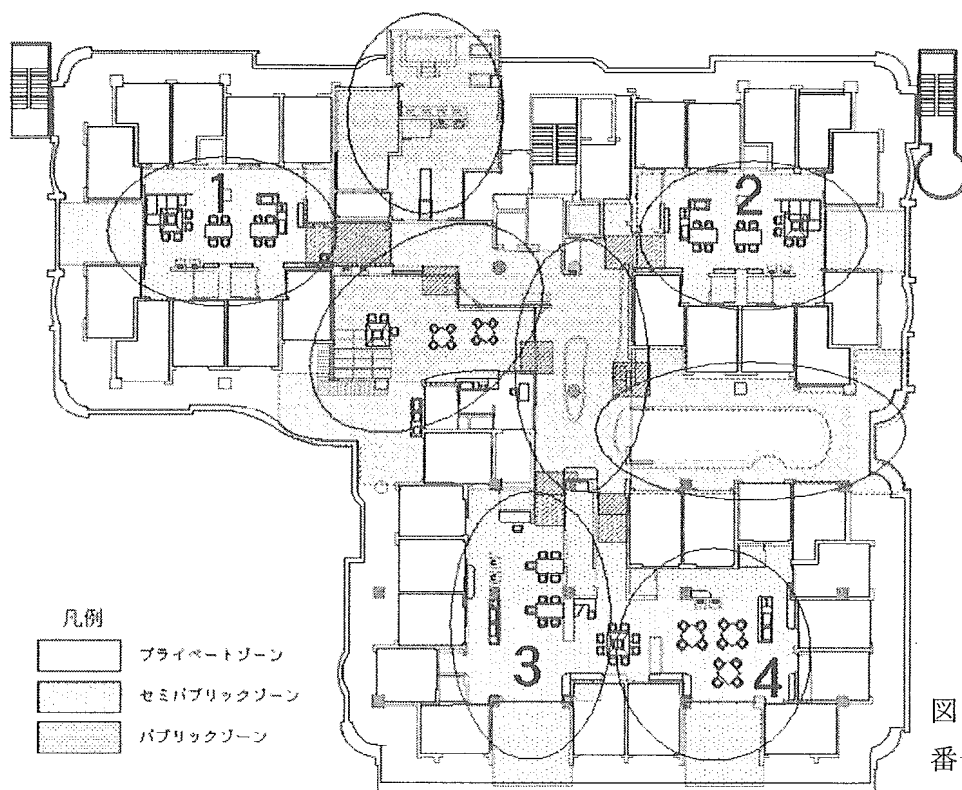


図 1. ゾーニング図
番号 1～4 はケアユニットを示す

設計段階から考慮することが必要であり、施設利用者である高齢者の問題としてだけでなく、建築的な問題としても解決する必要がある。

Way finding を設計手法として考慮するにあたって、2つの計画①ゾーニング計画②動線計画を行った。ゾーニング計画とは、施設のある範囲を単位として区分することであり、本研究においては、高齢者の視点から「パブリックゾーン」（廊下・外部・浴室など）「セミパブリックゾーン」（ケアユニット共用空間）「プライベートゾーン」（個室）という公私にわたる三段階のゾーンに区分けした（図1）。また動線計画とは、人の動きとそれにかかわる物の位置関

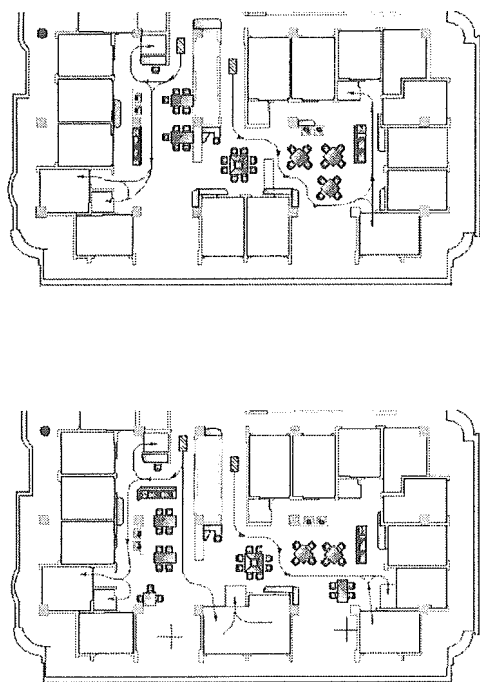


図2. 家具、キッチン、便所の配置の検討
上：現状案：ケアユニットの入り口から個室までの動線が長く複雑なものになっている。

下：改善案：家具やキッチンに妨げられることなく、便所まで移動が最短となる。

係を平面上での線の軌跡として表された動線の重なりや交差などに対して、建築的な方策を講じることである（図2）

この2つの計画において、設計上の問題を具体的検討事項とし、以下の15項目に絞り、取り上げた。

（具体的検討事項）

1. 自然光を取込む工夫

高齢者は、自然光を感じるにより、自然のリズムを体感し、健康を維持することが重要である。

2. 便所の増設

トイレは痴呆の場合「見えること」が重要であり、距離が長いと失禁しやすくなる。夜間のトイレまでの動線は単純で近距離が望ましい。身近にトイレを設ければ、自分でいけるケースが増える。

3. 浴室での個別入浴の設置

個浴の一つとして家庭サ具体劇な内容をイズの浴槽を設け、入浴時間外でも、失禁などで汚したなどの緊急時など、簡単に入浴できるようにする。またなじみのある大きさであることから心理的な負担も軽減できる。

4. セミパブリック（廊下）内の休憩スペース及び居場所の設置

長い距離を移動する場合の、身体的な負荷や不安感を軽減するために、途中で休憩できるようにする。また体力が低下しても外へ出向く意欲を削がないような距離が望ましい。

5. 多様な居場所の設置

入居者が自分の居場所をいくつかの中から